

短期 EUROPA 派遣報告書

1) 氏名

小久保真理江

2) 派遣先

ボローニャ大学 (Università di Bologna)

3) 派遣期間

平成 24 年 8 月 19 日～平成 24 年 10 月 18 日

4) 派遣の概要

短期 EUROPA プログラムによって 8 月 19 日から 10 月 18 日まで約二ヶ月間ボローニャに滞在した。今回の渡航の主要な目的は、共同論文指導制度のもとイタリア語で執筆した博士論文の最終審査をボローニャ大学で受けることである。この論文はイタリア 20 世紀前半の作家チェーザレ・パヴェーゼとアメリカ文化との関係をテーマとしており、論文題目は「パヴェーゼ、文学と映画 —アメリカ神話に関する新たな解釈— (Pavese tra letteratura e cinema: nuove prospettive sul mito americano)」である。

到着日から審査日 (9 月 12 日) までの期間は、論文最終審査のための準備に取り組んだ。ボローニャ大学の指導教員であるロレンツィーニ教授と面会し、審査の形式や必要な準備について相談したところ、十五分のプレゼンテーションの後に質疑応答を行うという審査形式が確認できたため、まずはプレゼンテーションの準備を行った。短い時間で論文の概要や重要な点を正確に伝えられるよう発表原稿の推敲を重ねた上で、何度も発表の練習を行った。また、研究者の友人にも発表原稿やプレゼンテーションを見てもらい助言を受けた。さらに、質疑応答や議論に備えて自身の論文や関連文献を再読し、予想される質問や批判について考えを整理した。

論文審査は 9 月 12 日 12 時からイタリア文学科の校舎で行われた。審査員は、東京外国語大学側指導教員の和田忠彦教授、ボローニャ大学側指導教員のニヴァ・ロレンツィーニ教授、フィレンツェ大学の比較文学研究者マリオ・ドメニケッリ教授の三人である。十五分のプレゼンテーションで研究の背景や論文の概要、独自性などについて話した後、審査員の先生方から意見や質問をいただいた。

質疑応答終了後は、審査員を残して一旦退室し、教室の扉の外で審査の結果を待った。イタリアの論文審査では、質疑応答後、審査員だけがその場に残り審査結果について議論した後、博士候補者が呼び戻され結果が言い渡される。長い年月をかけ様々な困難を乗り越えながら完成させた論文であったため、博士号授与という審査結果が言い渡された瞬間はとりわけ感慨深く、喜びや安堵感、そして多くの人々への感謝の気持ちがこみ

あげてきた。

審査後の期間は、帰国の準備や今後の研究のための準備などを行った。特に多くの時間を取られたのは家を引き払うための荷物の整理であった。日本から研究のために多くの書籍を持ってきていた上、三年間の留学中さらに多くの書籍を購入していたため、これらの大量の書籍をどうするかということが一番の問題であった。郵便局や宅配会社などで日本への書籍郵送についての情報を集め、どのような形で送るべきか頭を悩ませたが、結局は新たな研究活動のため数ヶ月後にボローニャに再び戻ってくる可能性が高いことを考慮して、友人の家の車庫で一時的に預かってもらうことにした。こうした住居引き払いのための作業と並行して、11月にドイツで予定されているITP国際セミナーに向けての準備も行った。このセミナーでは「チャーザレ・パヴェーゼの映画論」という題目で博士論文の成果の一部を発表する予定である。セミナーがドイツで開かれるという点を考慮して、ドイツ映画についての考察に注目しながらパヴェーゼの映画評論を再び精読・分析した。

5) 派遣の成果

今回の短期派遣の最大の成果としては、論文最終審査に合格し博士号を取得したことが挙げられる。もちろんこれは、今回の短期EUROPA派遣のみによる成果ではなく、2010年から二年間に渡って支援を受けたITP-EUROPAプログラムによる派遣の成果でもある。ITP-EUROPAや博士論文共同指導制度によって十分な支援と指導を受けながらボローニャで論文執筆を進めたからこそ、博士号取得という目標まで到達することができた。両プログラムの関係者の方々にはこの場を借りて改めて心からのお礼を申し上げたい。また、博士論文の最終審査で審査員の先生方から今後の研究や論文の出版に向けて多くの示唆をいただいたことも今回の派遣の大きな収穫であったと言える。特に外部の審査員であるドメニケッリ教授からは具体的な示唆や助言を多くいただいた。

6) 今後の課題

今後の第一の課題は、博士論文審査の際に審査員の方々からいただいた助言を活かして研究をさらに発展させることである。これまでの研究成果を様々な場で発表していくと共に、博士論文では取り上げなかった関連事項についても分析・考察を進めていきたい。具体的には、パヴェーゼと同時代の他のイタリア人作家とアメリカ文化との関係について検討していきたいと考えている。また、これまでの留学で得た知識や研究の成果を教育活動や翻訳活動を通してより多くの人々に還元していくことも今後の重要課題である。